

## 『スパークス 日本株長期投資のすすめ』

スパークスの株式投資、株式市場などに対する見方を紹介するコラムです。

第84号(2010年11月26日)

### 「銘柄の分析ということ」

日本の株式市場には3500社以上の上場銘柄がありますが、私どもは出来るだけ自分達が詳しい銘柄にしぼって投資を行うことが株式投資で成功するための近道だと考えます。これは、職業の世界において医者やスポーツ選手がプロとして成功するために、それぞれの専門分野に特化するのと同じことです。心臓外科医が脳腫瘍患者の手術をすることはなく、歯科医が目の病気を診察することがないように、株式投資でも自分が精通しない分野の株式に対して自らの大切な資産を投じることは避けるべきと考えます。

2000年のITバブル相場では、インターネット株やハイテク株を、企業の実態についてきちんと把握するよりも株価の騰勢で買った多くの投資家が損失を被りました。本来、将来を見通しにくい企業の株価というのは、不確実性が残る分、ディスカウントされた価格水準で取引されなくてはならないはずですが、しかし、現実にはこういった企業の株価は、その実態がミステリアスであるほど、高く買われる傾向がありました。

このような現象がおきるのは、ひとえにその銘柄について淡い期待感が醸成されるためであり、一攫千金を夢見て宝くじを買うことと同じ行動といえます(「Lottery Effect」(宝くじ効果)といいます)。一発大当たりを狙って宝くじを買う行為は、当選確率をあげるにはつながりませんので、必ずしも合理的な財産形成手段だとはいえません。株式についても、「宝くじ効果」によって銘柄選択を行うことが、投資で失敗する大きな理由のひとつとなります。私どもは、自分でよく理解できない企業の株に投資することは大きなリスクだと考えます。むしろ、他人より詳しい分野・業界を特定し、銘柄調査を進め、そのなかから最も業績が伸びそうなものを選ぶのが賢いやり方と考えます。

もうひとつ重要なのは、平凡で変化に乏しく、ともすると退屈と見られるビジネスこそ投資の注目に値するということです。本年3月26日付SPARX Wayで紹介した、過去20年間における東証1部上場銘柄の株価上昇率(分割考慮後)上位10社(キーエンス、ユニ・チャーム、ホンダ、HOYA、しまむら、キヤノン、信越化学工業、イビデン、参天製薬、テルモ)に共通しているのは、その殆どが今も昔も変わらず同じビジネスを展開しているという点です。

しばしば株式市場では、事業内容やビジネスモデルが劇的に変貌を遂げる企業の株価がもてはやされるという現象がみられますが、現実の世界では、これとは対極に位置するような企業群が真の株価成長を実現しているのです。自社の得意とする事業分野で、ひたすら競争優位性の強化を怠らず、コストをしっかり抑え、成長サイクルを繰り返している企業群こそが魅力的な投資対象となると私どもは考えます。

(注) 本コラムは、マネックス証券Web-Site「マネックスラウンジ」の「マネックスメール」に掲載されている「スパークス・アセット・マネジメントの『SPARX Way』」をもとにスパークスが作成したものであります。また、上記は株式投資に関して理解を深めていただくためのものであり、特定の有価証券を推奨しているものではありません。



本資料は、スパークス・アセット・マネジメントが情報提供のみを目的として作成したものであり、金融商品取引法に基づく開示書類ではありません。また特定の有価証券の取引を勧誘する目的で提供されるものではありません。スパークス・アセット・マネジメントとその関連会社は、本資料に含まれた数値、情報、意見、その他の記述の正確性、完全性、妥当性等を保証するものではなく、当該数値、情報、意見、その他の記述を使用した、またはこれらに依拠したことに基づく損害、損失または結果についてもなんら補償するものではありません。ここに記載された内容は、資料作成時点のものであり、今後予告することなしに変更されることもあります。また、過去の実績に関する数値等は、将来の結果をお約束するものではありません。この資料の著作権はスパークス・アセット・マネジメントに属し、その目的を問わず書面による承諾を得ることなく引用または複製することを禁じます。